様式Ｃ－１９

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成２４年　４月１２日現在

機関番号：10101
研究種目：若手研究（B）
研究期間：2010～2011
課題番号：22730681
研究課題名（和文）体育科における「教師の成長過程モデル」の開発とその妥当性に関する実証的研究

研究課題名（英文）An empirical study to development and assessment of the efficacy of 'Model the growth process of the teacher' in during physical education classes in elementary school

研究代表者
厚東　芳樹（KOTO YOSHIKI）
北海道大学・大学院教育学研究院・助教
研究者番号：80515479

研究成果の概要（和文）：
教師の「成長過程モデル」の開発に関する研究を実施した。その結果，①初任教師は授業の定石（基礎的条件を満たす力）を習得すること，②経験年数10年目以上になると，自身の振り返りと子どもからの評価とも対応するようになる一方で，学習集団の組織・運営に特化した授業目標へと移りやすく，「運動技能」がほとんど向上しない授業になっている教師も存在してくること，③各教師が着実に成長していくためには，目指す教師像の明確なイメージ化が重要であることを，それぞれ導出した。

研究成果の概要（英文）：
This study, we developed the 'Model the growth process of the teacher'. The results obtained are as follows. (1) The starting salary is to learn the formulas of class, (2)After the first teacher of 10 years, reflect on teaching and learning outcomes of children it has been matched. However, it was found prone to expanded learning group aimed at improving teaching, and that you are in class "motor skills" almostdoes not improve,(3)Derived, respectively, that in order to grow a teacher, over a clear image of the "image of the teacher aim" is important.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
2010年度	1000000	300000	1300000
2011年度	1000000	300000	1300000
年度			
年度			
年度			
総　計	2000000	600000	2600000

研究分野：社会科学
科研費の分科・細目：教科教育学
キーワード：体育科、教師のキャリア発達、成長過程モデル、学習成果（態度得点と運動技能）を高める教師、反省尺度（反省得点）、

１．研究開始当初の背景

一般に，キャリア発達の様相は，一様でない．なぜなら，いろいろな職業があり，いろいろな人間がおり，いろいろな環境があるからである。また，「人間」の要因に限定しても，一人ひとりで生き方が様々に異なっている．このような現状の中にあっても，「すぐれた実践者」は存在している。それ故，「すぐれた実践者」へと導くキャリア教育は必要である。

本研究は，すぐれた教師への「成長過程モデル」の開発とその妥当性を実際の体育授業の場で実証することを目的としたものである。これには，「同じ経験をしても，成長する人とそうでない人がいる」とする現象を教師のキャリア発達の側面から追求してみようとする動機がある。

これまで誰しもが学習成果の高い教師（以下，優れた教師と称す）になりたいという願いから，優れた教師が有する知識や技術を明らかにしようとする Teaching Expertise 研究がアメリカを中心に押し進められてきた。とりわけ，優れた教師の「技術的実践」に関しては，行動科学の発達に伴って「プロセス－プロダクト」研究法を用いた「授業の科学」が飛躍的に進歩し，学習成果を高める指導プログラムや指導技術がある程度まで解明されてきた。その一方で，マサチューセッツ工科大学の Schon（1983）が，「技術的実践」の優れた専門家は「省察（reflection)」も優れていたことを導出したことは周知の通りである。

この Schon の研究を契機に，国内外を問わず，教師教育界においても「反省的実践」を主軸とする研究が事例的に数多く展開されるようになった。とりわけ，アメリカの Teaching Expertise 研究においては，優れた教師を対象とした省察研究が数多く展開されてきている。これにより，様々な角度から優れた教師の実体が明確になりつつある。それにも関わらず，未だ，山積する学校教育問題（子どもの側では，いじめと不登校，学力の二極化，学級崩壊などがある。一方，教師の側では，「不適格教員」の増加がある）の解決が図れないでいる。

このことについて，これまでの教師教育界の一連の研究には，次のような批判が成立する。すなわち，いずれの研究においても優れた教師にみる知識や技術，省察の仕方の導出に留まり，なぜ優れた教師が学習成果の高い授業を展開できるようになったのかという教師の成長過程について検討してこなかったという批判である。こうした批判が成立する背景には，「技術的実践」と「反省的実践」の同時性を担保する要件を究明してこなかったことが大きな一因としてある。

確かに，これまで教師の実践的力量の向上を企図した教育プログラムが様々な研究者によって提示されてきている。しかしながら，いずれの研究においても，「技術的実践」と「反省的実践」を分離して捉えてしまっていたところに大きな問題点があった。とりわけ，わが国では稲垣・佐藤（1996）が，「技術的実践」に偏った教師の授業実践意識から，「反省的実践」を主軸とする授業の探究へと意識を変革していくことの重要性を指摘した。こうした稲垣・佐藤の指摘を誤解して，「技術的実践」と「反省的実践」を分離して捉えてしまう研究者や実践者が生起してしまったのである。また，Schon の「反省的実践家」というネーミングについても同様の批判が成立する。

そこで本研究では，アメリカを中心とする Teaching Expertise 研究の先行史を批判的に検討することで「教師の成長過程モデル」の理論的仮説を導出して，体育科における教師の「技術的実践」と「反省的実践」の両面から上記の仮説を検討することで「教師の成長過程モデル」を開発して，そのモデルの妥当性を実際の体育授業の場で検証していくことを目的とした。

２．研究の目的

本研究の目的は，体育科における「教師の成長過程モデル」の開発とその妥当性を実際の体育授業の場で検証することにある。そのためには，次の 3 つの研究課題があった。すなわち，(1)「教師の成長過程モデル」の理論的仮説を設定する，(2) 上記 (1) で作成したモデルの仮説を検討して，「教師の成長過程モデル」の開発をする，(3) 上記 (2) で開発したモデルの妥当性を実際の体育授業の場で検証する，の計 3 点である。

本研究では，主として上述した (2) (3) について取り組んだ。具体的には，作成した「教師の成長過程モデル」の仮説を検討するため，小学校体育授業を対象に，学習成果（態度得点）の高い教師とそうでない教師とで体育授業に対する「反省的思考」が教職経験年数の向上に伴ってそれぞれどのように異なってくるのか検討した。これにより，体育科における「教師の成長過程モデル」の開発を行った（1 年目)。また，作成した「教師の成長過程モデル」を実際の体育授業の場で検証する

ため，見込みのある教師３名を対象に，恒常的に態度得点の高い教師の体育授業実践の記録とそこでの「ジャーナル（授業日誌）」を介入（紹介）していくことで，その教師の「出来事への気づき（予兆）」，「反省的思考」および実際の体育授業がどのように変化するのか事例的に検討した（2 年目）。

３．研究の方法

研究課題１：教職経験年数という条件が体育授業における教師の「反省的思考」に及ぼす影響に関する研究（1年目）

調査の対象：北海道下・大阪府下・岡山県下・香川県下・兵庫県下の小学校高学年（5・6年生）担任教師122名を対象に調査を実施した。

調査の内容と時期：筆者らが作成した8尺度20項目からなる「反省的尺度」を用いた調査を実施した。このとき，年度により学級の実態が異なることから，各被験教師には2学期に実施した体育授業を振り返ってもらいながら回答してもらうこととした。回答に際しては，7段階評定尺度法（「1点：まったくしてこなかった」～「7点：よくしてきた」）の無記名法で実施した。また，学習成果（態度得点）の測定については，体育授業に対する態度測定法を用いることとして，同時期に調査を実施するよう依頼した。

手続き：本研究を推進していくにあたって，対象とした教師およびその教師が配属されている学校長からの承諾が必要となるが，すでに，いずれの学校においても承諾を得て実施した。また，調査対象とした学級の保護者に対して説明をし，合わせて承諾を得ることができた。

研究課題２：教師の「技術的実践」と「反省的実践」への介入がその教師の「出来事への気づき」と「反省的思考」に及ぼす影響に関する事例検討（2年目）

調査の対象：北海道下の小学校高学年（5・6年生）を担任している見込みのある教師3名を対象に，調査を実施した。見込みのある教師とは，シーデントップ（1991）の見解を下敷きに，Tsangaridou and O’Sullivan（1994）などが用いた用語で，①子どもに関わり，彼らの学習を促進させようとする教師，②教える教科の内容について熟知しようとすること，およびそれらをいかに子どもに教えるか熟知しようとする教師，③子どもの学びのマネージメントやモニタリングをしようとする教師，④自らの実践について系統的に思案し，経験から学ぼうとする教師（省察・反省），⑤学びの共同体のメンバーであろうとする教師，という5つを具備した教師をいう。

調査の内容と期間：被験教師3名には，恒常的に態度得点の高い3名の教師の実践事例をもって介入する。現在，著者らは恒常的に態度得点の高い教師3名を対象に，彼らの体育授業実践とそこでの「ジャーナル（授業日誌）」を導出中である。そこで得られた結果を，被験教師3名に紹介（介入）することとした。調査する期間は，3つの単元（バスケットボール，走り幅跳び，マット運動）を6カ月（5月～10月）の間に実施してもらい，一単元毎に「反省的尺度」を用いた調査と「態度測定法」を実施するように依頼した。合わせて，毎授業後の「ジャーナル（授業日誌）」の記述，「出来事」調査票への記述，自らの授業実践に対する再生刺激法によるインタビューという3点からの分析（3点分析法）を実施した。

手続き：収集した「ジャーナル（授業日誌）」の記述，「出来事」調査票の記述，インタビューで聴取した内容は，いずれも被験教師の主観的な情報の切り取りである。そこで，これらを分析する際には，より客観的な情報へと変換する必要があった。そこで，小学校教師で10年以上恒常的に態度得点の高い教師1名，小学校現場の教師の指導に日々あたっていた元教育委員会指導主事1名，および著者を含む3名で検討して，全員の合意が得られるまで得られたデータの分析を実施した。

※なお，研究課題1を遂行するにあたり，調査対象者を教職経験年数群毎に分類したとき，ある教職経験年数群だけ2名以下となり統計学上の問題が生起する可能性が考えられた。そこで，14名の研究協力者の先生方に調査対象者122名のコンテキストを事前に聴取してもらった結果，上述した問題が生起することはなかった。同様に，研究課題2を遂行するにあたり，積雪などの関係から体育授業が実施できない場合が考えられたが，問題なく実施することができた。

４．研究成果

研究課題１について，得られた結果の大要は以下の通りであった。

（１）優れた教師を態度得点の高い教師と捉え，その得点と教職経験年数との関係を検討した。その結果，10 年目まで得点が向上し，その後，逓減する傾向を示した。ただし，初任教師（1～5 年目）の値まで得点が下がることはなかった。

（２）反省得点と教職経験年数との関係を検討した結果，「観察・判断」をはじめとする 6 尺度において 10 年目まで得点が向上し，その後，逓減する傾向を示した。これより，「観察・判断」をはじめとする 6 尺度が態度得点

の得点推移に関係していたものと考えられた。さらに，6 尺度を構成する項目（16 項目）の得点と教職経験年数との関係を検討した結果，14 項目において反省得点の場合と同様の得点推移が認められた。とりわけ，「授業設計段階」に関わった項目や授業マネジメントや子どもの学習過程の探求に関わった項目はすべて含まれていた。このことは，学習成果（子どもからの体育授業に対する総括評価である態度得点）を高める優れた教師へと経年的に成長していくためには，運動種目に対する「教材研究」と運動技能の向上を授業の中核として捉えた実践の積み重ねが重要であることを示している。

（３）上述したいずれの尺度・項目においても，初任教師（1～5 年目）得点は中間的反応（3.6 点～4.7 点）を示した。このことは，経験年数 5 年未満の初任教師にとって提示した反省項目の内容が意識の俎上になく自覚化されていなかったのか，項目内容の実際的な意味がわからなかったのか，もしくはその両方なのかということを示唆している。これより，初任教師は他の教師群に比して自らの体育授業を反省する能力が乏しいものと考えられた。

（４）10 年目以降でなぜ態度得点・反省得点共に得点が逓減していくのかを授業の特徴が現れている態度項目点から検討した。その結果，「深い感動」「学習のよろこび」「挑戦する態度」といった運動技能の向上と関係した項目と，「授業の流れ」「体力づくり」「授業の印象」「体育授業に対する好嫌」といった運動従事量の確保と関係した項目の得点が 10 年目以降，顕著に逓減していく傾向が認められた。上述した（２）の結果と合わせると，教師の体育授業に対する振り返りと子どもの側からみた授業評価とは対応関係にあったことがわかる。つまり，「授業設計段階」で運動メカニズムの解釈などの「教材研究」が不十分であったという教師側の振り返り，さらには授業マネジメントや子どもの学習過程の探求に関わる教師側の振り返りが，子どもの側からみた担任教師の体育授業の評価とそれぞれよく対応していた。

（５）他方，10 年目以降に態度項目点が漸増したものが存在した。すなわち，「仲間との協力」「男女意識」「みんなのよろこび」「仲間との協力」といった学習集団の組織・運営の機能の善し悪しと関係する項目の得点は漸増した。このことは，経験年数の増加に伴って，体育授業では学習集団をどのように組織・運用するかといった教授活動に力点を置いて指導を展開してきた可能性の高いことが読み取れた。今後，こうした教師のもつ「育てたい子ども像」などが彼らの授業実践にどのような影響を及ぼすのかについては検討していかなければならない.

（６）これらのことから，総じて学習成果（態度得点）を高める優れた教師へと経年的に成長していくためには，次の 3 つのステージを超えていく必要のあるものと考えられた。すなわち，（Ⅰ）いい授業を成立させるための基礎的条件であるマネジメントと運動従事量を授業中に満たすこと，（Ⅱ）いい授業を成立させるための内容的条件のすべてと関連している「教材内容と教授方法からなる複合的知識」を豊富に身につけていくこと，（Ⅲ）子ども一人ひとりの学習過程を探り，「教材内容と教授方法と子どもからなる複合的知識」を高めていくこと，といった過程を経ることが重要であるものと考えられた。

研究課題 2 については，恒常的に態度得点の高い教師 3 名の授業実践（録画したもの）と彼らが記したジャーナル（授業日誌）を被験教師 3 名に介入（紹介）し，実際の授業の改善および反省的視点と授業中の「出来事への気づき」の変容を検討した。得られた結果の大要は以下の通りである。

（１）経験年数 1 年目の初任教師の場合，恒常的に態度得点の高い教師 3 名の授業実践から，子どもたちの運動従事量の多さが共通して優れていることを発見した。合わせて，ジャーナル（授業日誌）の記録から，「今日は，朝の段階で体育の準備ができなかったため，ややマネジメントに時間がかかったが，子どもたちが予想以上に早く動いてくれたことに驚いた。」といった記述を発見し，このことが子どもたちの運動量の確保につながっているといった原理を導きだしてきた。その結果，初任教師の授業では，単元前よりも単元後の方がマネジメント行動の時間が顕著に少なくなり，子どものたちの運動の時間が向上したものとなった。

（２）しかしながら，初任教師の単元後の学習成果は，運動技能，態度得点ともに向上することはなかった。これには，単元前後で授業中の「出来事への気づき」の量が 1 個から 3 個へと増えたものの，その内容は授業のマネジメントに関することがほとんどであったことが関係していたものと考えられた。つまり，「子どもたちがテキパキと片づけができるようになってきた」「道具がちらかっていた」といったものがほとんどであり，授業の中核である子どもの「技能的つまずき」に関する気づきはまったく認められなかった。

（３）経験年数 9 年目の教師の場合，恒常的に態度得点の高い教師 3 名の授業実践から，子どもたちの会話が運動の原理に関するものであったことを発見していた。また，授業日誌の中から，優れた教師は共通して教材研究の深いことも導出していた。そこで，経験年数 9 年目の教師は，体操経験者でマット運

動を得意とする同僚教師に指導方法などを相談する機会を自らつくり，運動教材に関わる知識を広げるように努めていた。その結果，「出来事」調査の結果より，両教師は単元前よりも単元後の方が，子どもの「技能的つまずき」によく気づくようになると同時に，「合理的推論・目的志向的対処」と「文脈的推論・目的志向的対処」による「推論－対処」の記述量が増加し，いずれの授業も子どもの学習成果（運動技能，態度得点）の向上する結果が認められた。

（４）上記（３）の結果より，反省的視点への介入だけでなく実際の授業実践の紹介（介入）は，教材研究の重要性に気づかせる働きのあったものと考えられた。しかしながら，同様の実践を初任教師にも紹介したが，ここまでの変容は認められなかった。このことは，経験によって掴めるものとそうでないものとが存在していることを示唆している。

（５）経験年数 12 年目の教師の場合，恒常的に態度得点の高い教師３名の授業実践を視聴し，「運動量が少なく，子どもは満足しないのではないか」「集合がただ集まっただけで，整列していない」といった気づきをされ，やや否定的な捉え方をされていた。実際の授業については，子どもの学習成果（運動技能，態度得点）共に向上することはなかった。また，単元前後で「出来事への気づき」の記述量および内容共に変化がほとんど認められず，「心情的推論・理解志向的対処」が大半であった。

（５）最後に，「各教師が目指す教師像の明確なイメージの有無」が教師の成長を左右する可能性について検討した。これにより，経験年数 9 年目の教師と 12 年目の教師とでなぜ授業実践の変化が生起したものとそうでないものとに分かれたのかを検討した。その結果，経験年数９年目の教師は，紹介（介入）した優れた教師の一人が授業日誌で卓越した実践者の一人として著名な「高田典衛氏」の著書について触れていたことが気になり，同氏の著書を買い集めていた。つまり，経験年数９年目の教師は，具体的な目指す教師像として「高田典衛氏」をイメージして授業研究に参加してくれていたのであった。これに対して，12 年目の教師は，憧れの先輩教師がいると述べ，「子どもと一緒に遊べること」や「子どもたちを上手く整列させること」に長けた教師を優れた教師像として有していたことがわかった。こうした相異が，教師の振りけりや授業中の「出来事への気づき」の相違に現れたことは否定できず，結果的に実際の子どもの学習成果に影響してきたものと考えられた。今後，卓越した実践者たちの実践記録に埃を被らせてしまうのではなく，より多くの教師とりわけ初任教師に紹介し，卓越した実践者たちの実践知を共有していかなければならない。

５．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計５件）

(1) 厚東芳樹、初任教師の授業計画場面に関する反省的視点への介入が授業の基礎的条件に及ぼす影響－マネジメント行動と運動従事量に着目して－、体育教育研究、9 号、（印刷中）、2012

(2) 厚東芳樹、ソーラン節の故郷積丹町における「夏休み国際英語村」実践報告、体育 教育研究、特別号、1-11、2011

(3) 厚東芳樹、教職経験年数という物理的条件が教師の反省的思考に及ぼす影響―小学校低学年担任の男性教師について―、北海道大学大学院教育学研究院紀要、112 号、59－71、2011

(4) 厚東芳樹・宗野文俊、小学校体育授業における教師の授業中の「出来事への気づき」に関する研究―学習成果（ゲームパフォーマンス）の相違に着目して―、北海道大学大学院教育学研究院紀要、110 号、49－64、2010

(5) 厚東芳樹・長田則子・梅野圭史、アメリカの Teaching Expertise 研究にみる教師の実践的力量に関する文献的検討、教育実践学論集、11 巻、1-13、2010、査読有

〔学会発表〕（計１件）

(1) 長田則子・梅野圭史・厚東芳樹、教師の「感性的省察」に関する一考察：続報－すぐれた実践者の「出来事のポリティクス」－、日本体育・スポーツ哲学会（第 38 回大会）、2010 年 8 月 21 日、新潟県新潟市（新潟大学）

６．研究組織

(1) 研究代表者

厚東　芳樹（KOTO YOSHIKI）

北海道大学・大学院教育学研究院・助教

研究者番号：80515479